

2015年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 目次

2015年1月4日	「祈り」
2015年1月11日	「詩篇の「祈り」より」
2015年1月26日	「福音の原点」
2015年2月1日	「永遠の生命の聖言」
2015年2月8日	「祈りは神の愛への応答」
2015年2月15日	「われ弱きときに強し」
2015年2月22日	「前進あるのみ」
2015年3月2日	「天国はその人のものなり」
2015年3月8日	「汝はわが僕、われ汝を強くす」
2015年3月15日	「平凡な日々の中での感謝と讃美」
2015年3月22日	「主キリストはわが牧者」
2015年3月29日	「キリスト道講演会」――「奈良」から「京都」へ――
2015年4月19日	「京都キリスト召団の使命」
2015年4月26日	「福音伝道と天賦天職」
2015年5月3日	「此の火すでに燃えたらんには」
2015年5月10日	「御霊と能力との証明による」
2015年5月17日	「聖霊のバプテスマ」
2015年5月24日	「聖霊の賜物」
2015年6月7日	「テサロニケ教会における信、愛、望」
2015年6月21日	「相互の愛および凡ての人に対する愛」
2015年6月28日	「詩篇および新約聖書と「祈り」」
2015年7月5日	「詩篇および新約聖書と「祈り」」 (第2回)
2015年7月19日	「詩篇および新約聖書と「祈り」」 (第3回)
2015年7月28日	「使徒行伝と「祈り」」
2015年8月2日	「パウロの伝道旅行より」――ピリピとミレトにて――
2015年9月6日	「わがすべてのすべてなる主イエス・キリスト」
2015年9月13日	「わが主キリスト」
2015年9月20日	「神の義」と福音
2015年9月27日	「旧約」と「新約」(ヘブル書より)
2015年10月4日	――大祭司イエス・キリストによる永遠の贖罪――
2015年10月18日	「見えるもの」と「見えないもの」
2015年11月1日	「汝は我が愛しむ子 わが悦ぶ者なり」
2015年11月8日	「日々の生活の中での神信頼」
2015年11月15日	「まず神の国と神の義を」
2015年11月22日	「霊言体受」
2015年12月1日	「功なくして神の恩恵により」
2015年12月6日	「狭き門、細き路」
2015年12月6日	「我は福音を恥とせず」



祈り

2015年1月4日

聖書朗読 ヨハネ伝15章1～17節

今日の講筵で、奥田先生から、昨年度、京都集会の一年間のスローガンは「信、望、愛」だったが、今年度は「祈り」を一年の課題にしたいとお話があった。京都集会は、祈りの集会であり、祈りを通してキリストの御意を受け取ってきたが、それを今年、更に深め前進させたいとの思いである。何を、如何に祈っていくかは、各自が一年間、実践的な「祈り」と、日常生活での働きを通して、体現していくことになる。

今日の講筵は、旧約聖書「詩篇」から、ダビデの歌などに現れている「祈り」に注目した。ダビデは心の切なる思いを神に向かつて訴え祈った。神の姿は見えないし、祈りが神に届いたか否かも分からない。しかし、ダビデは祈りの中で、神は私の願いを聴いてくださったと確信し、神をたたえる讃美の歌をうたった。

「わがこころ定まれり、われ歌いまつらん、^{たた}頌えまつらん。……そは汝のあわ

れみは大いにして天にまで至り、なんじの真実は雲にまで至る」(詩篇57篇から)

私たちも、ピンチの時、試練の時、行く道に迷うとき、ダビデのように真心をもって祈りたい。私たちには生ける主様がおられ、主は、私たちと一つになってくださり、多くの^み果を結ばせ、^{よろこび}喜びを満たしてくださったのだから。

奥田先生は、最後に、私たちがキリストと一つにされており、十字架で神の子とされていること、どこまでも平伏して御名を讃えることが大事、と話された。また、祈りの実践にあたり、ヨハネ伝15章を、計画図、設計図として活かしていただきたいと言われた。

『ほのぼのコラム』お爺ちゃんが孫のK君の家を訪ねると、K君が静かに横たわっており、その様子を、お爺ちゃんや家族が輪になって見つめていた。君は身体が不自由だが、心は喜びにあふれて輝いている。そう感じたお爺ちゃんはその様子を、まるで飼う葉桶の中のイエス様のような話と話した。その話をするお爺ちゃんは、目を細めてとても嬉しそうだった。「IさんとK君の作品」が、1月9日(金)～同12日(月)、京都文化博物館で開催の「新春書芸展」において展示されます。



詩篇の「祈り」より

2015年1月11日

聖書朗読 詩篇130篇

新年2回目の集会には、奈良からKご夫妻が出席され、K兄からは、小池先生の著作を紹介されながらキリストにある喜びの事態を、Y姉からは、テトス書2章11節から13節を引いて最近の信仰生活についての感話をされました。

奥田先生は、この1週間の状況は惨憺たるものだったと、ご自身の体験を率直に告白されました。そして、深い淵を体験することなしには詩篇130篇の叫び声を理解することはできない、深い淵の中からの叫びを受けとめてくださるのは主様しかないと言われ、詩篇の幾つかを引用されて、苦難を突破するには祈りの力が必要であると告白されました。絶望に陥った時には、ありのままの姿で、

「私はどん底にいます、助けてください」

と心の底からの祈りをしてください。主は、素直な叫びを聞き入れられて、一步後退したように見えても、二歩前進させてくださいます。

私たちが、主様にしがみつき、

「あなたがおられないと何もできません」

との祈りを持っていますと、主様は、

「心配することはない、大丈夫だ」

と励ましてくださり、日常的には浮き沈みがあるように見えても、決して絶望に落とされることはありません。

私たちの仕事、日常の業は、全て主様の守りの中で、祈り心で行わないと虚しいものになります。全ての仕事は、神の守りの中で全うされるのです。自分の力だけで行うのではなく、主様とともに行う仕事なら、たとえそれが厳しいものであっても、不如意に終わっても、主様から祝福されたものとなり、仕事のあとは安んじて眠ることができます。

詩篇は、どのような事態に遭っても主様に依り頼んでいる姿や、また、主様は私たちのどのような姿をも受け入れてくださることを記述しています。艱難に出会った時には、詩篇を私たちの祈りの助けとし、また導きの指針として歩むようにしてください。そこから力が来て、いかなる時にも、キリストは、内にいて励まし、外にいて守ってください。それが実感できます。先生のように、長い信仰歴のある方の告白であるが故に、私たちにとっても、スランプに陥った時に、いかにしてそこから脱却するかについての貴重な秘訣の告白であると受け取り、今後の生き方に活かしてゆくことができると思います。

引用された詩篇の箇所は、116篇、126篇、127篇、128篇、130篇、142篇、143篇です。



福音の原点

2015年1月26日

聖書朗読 イザヤ書55章(全)

仕事で訪れた天理教校の20歳前の学生さん達の、来訪者に対する気持ちのこもった挨拶に触れ、こういった、人を大切にする真心がなければ、どんなに良いことや役に立つことを話し伝えたとしても、キリストの福音は伝わらないだろうと思いました。今後の仕事や集会での在り方として、とても大切なことを主は教えてくださったと思っています。

以下、集会で印象に残ったことや御言葉などをお伝えいたします。

福音の原点に常に立ち帰ることは、基本を身に付けることであり、他のどんな分野にも共通するとても大事なことです。

神さまが豊かな霊の生命(糧)を

「無条件であげるよ」

と呼びかけておられる(イザヤ書55章)。それを

「はい、ありがとうございます」

と感謝して受け取ることがいわゆる「信仰」と呼ばれるもの。

この世で、何のために生き、働くのか。それは金や自分の名声のためではなく、神さまの御心を行うため。あの世(天国)では、主の御声に耳を傾けて、主と共に主の御心の実現のために立ち働く天使(勇士)となる。であれば、まず、この世(現世)において、御心に適う働き方をするように努めよう。

キリストの霊の生命は、枯れ木に花を咲かせるほど凄いもの。勝負は晩年。

肉体を滅ぼしても、霊を滅ぼすことのできない者を怖れるな。主にある者は、神の御力によって守られているので、敵対する霊も害することができない。

恵みを与えてくださったのが主であれば、苦難を通して霊・肉共に鍛えられるのも主。

自己に捉われず、主に自分の全てを投げ出し、主と共に生きる。

キリストという無限無量の泉から溢れ出る恵みを感謝して受け取る。

神・キリストの恵みは、放蕩息子の譬え話のように、過ちに気付いて主に立ち帰る者を、

「よく帰って来た!」

と喜んで主は迎えてくださる。

マタイ伝20章の1デナリの譬え話のように、この世の労働者の多くは、主の葡萄園で働いたとしても不平不満が多いだろうが、キリスト者は、主の下で、主と共に働けることを喜んでい。その喜びを知って欲しい。



永遠の生命の聖言

2015年2月1日

聖書朗読 詩篇19篇

「これ神の言、すなわち歴世^{よよ}かくれて、今、聖徒に顕れたる奥義を宣伝へんと
てなり」(コロサイ書1章26節)

「汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今、見ざれども之を信じて、言ひ
がたく、かつ光榮ある喜^{よろこび}悦をもて喜ぶ。これ信仰の極^{はて}、すなはち靈魂の救を
受くるに因る。」(ペテロ前書1章8節)

「我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。見ゆるものは
暫時^{しばらく}にして、見えぬものは永遠^{とこしえ}に至るなり。」(コリント後書4章18節)

「語らず言はず、その声きこえざるに、その響きは全地にあまねく、その言は
地の極^{はて}にまで及ぶ」(詩篇19・3)

日本では、白隠禅師の次のような詩があります。

「闇の夜に 鳴かぬ鴉の声聞けば 生れぬ先の父ぞ恋しき」

人はそれまで五感によって知っていた世界とは違う別次元の世界(「肉」に対して「霊」と
呼ばれている世界)に導き入れていただくことが必要です。

「カム、カム、カム、父の懷を求めて帰つてきなさい。」

と聖書に何度も書いてあるとK兄が証言されましたが、この父の呼び声に応え、父の懷(主
イエス・キリスト)に回歸することなくしては、人間に本当の幸福はありません。自分の主義・
主張を捨てて、目に見えない全能なる主様に導かれる生涯、永遠の生命を与えられて、そ
こで、驚くべき運命が展開することを願います。

天界(霊の次元)の永遠の生命の聖言は見えませんが、字面ではなく御
言葉の奥に居てくださる霊的人格イエス・キリストとのふれあいの中で、私たちを永遠の
世界に導き入れてくださいます。そうになると、現世でどのような惨めな生活をしておろう
がおるまいが、大きなものに抱かれて、喜んで生きる経験を持つことが出来ます。

本日は、詩篇19篇、同119篇を共感共鳴して身読する賛美の集会となりました。



祈りは神の愛への応答

2015年2月8日

聖書朗読 ヨハネ第1書3章1〜3、14〜24節

来る3月28日(土)14時から、奈良市内の「春日野荘」において、奈良キリスト召団主催の「キリスト道講演会」が開催される。本日の集会で、美しく出来上がった講演会案内チラシを頂いた。演題が「福音の原点」であり、「講師の言葉」にはヨハネ伝3章16節の御言のほか、

「旧約・新約両聖書を貫く神の愛の呼び掛けの言葉に立ち返りましょう。」

とある。この講演会の主題について、今日の集会で奥田先生は、

「初めに神の愛があり、主キリストを私たちに賜り、生命の御言と聖霊によって、私たちを新たに生まれさせてくださったことが福音の原点である」

と話された。

講筵ではベティー・イーディー著『死んで私が体験したこと——主の光に抱かれた至福の4時間——』の中から、「祈り」の箇所を解説頂いた。深い内容であり印象に残った箇所を記載する。

① 「天使がいちばん喜びを感じるのは、祈りは直ちに応えられると信ずる真剣な祈り人に出会ったときなのです。」

② 「願いの祈りをひとたび口から出してしまえば、あとは祈りにすべてを委ね、その祈りに応えてくださる神の力を信頼するだけでよいのです。」

「信頼と忍耐、必要なのはそれだけです。」

③ 「感謝の気持ちは永遠の美德です。へりくだってお願いして、感謝して受けとらなければいけません。」

その他にヨハネ第1書4章7節の

「愛する者よ、われら互いに相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生まれ神を知るなり。愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。」

の御言が心に残った。御言をベースにして、先ず感謝から日々の祈りを始めたい。また、今日、先生が勧めてくださったように、讃美歌を聴いたり歌ったりする時間を持ち、主と一対一で祈りの対話をする時を大事にしたい。

本年4月5日(日)の午後、KKR京都くに荘において、奥田先生を講師として公開講演会を開催する準備を行っている。詳細は、近日お知らせします。



われ弱きときに強し

2015年2月15日

聖書朗読 コリント後書12章1〜10節

先生は、司会者の証言を受けて、ヒルティの『眠られぬ夜のために』の4月15日、1月3日、2月13日などを引かれ、

「自ら進んで神と、地上における神の大業とに仕えること、神のそば近くにあつて有益な仕事をするのが幸福への道である。神の霊の宿りをこの世の財宝以上に重んじるなら、人間の魂の中に神の霊が宿り、真の幸福がある。」

と、この世において神様のために働くことの重要性を語られました。

本題のコリント後書12章1節から10節は、パウロが14年前に第三の天（パラダイス）に引き上げられたときに示された深い啓示のことが記述されています。パウロは、7節で

「私の肉体に一つのとげ（弱点）を与えられた」

と言つて自分の弱さを告白しています。しかし、パウロは、神様に対して不満を述べているのではなく、「とげ」を思い上がることのないように与えられた恵みとして受け取っています。「とげ」こそが、パウロを神様の恵みに導くものであり、自分の弱さの中にこそキリストの恵みが宿り、キリストの力が豊かに働いてくださることを語っています。私たちも同じです。肩書、経歴、財産等の有る無しにかかわりなく、本質的には、弱さをかかえた弱い存在なのです。しかし、神様は、根底において私たちを支えておられます。見えるところでは、不幸さのような状況であつても、それは一時的なことにすぎません。自分でその状況を良い悪いと判断する必要はありません。神様の愛は、それ以上に深いのです。神様は、一人ひとりを大事にして、私たちを守ると決められた以上は、最後まで守り抜くと宣言されているのです。パウロが

「わが弱きを誇らん」

と告白したように、何があつても、あるがままの自分をそのままキリストに委ねることです。イザヤ書46章3〜4節にあるように、キリストは、それを全部引き受けられて、全責任をもつて最善の道へと導いてくださいます。

私たちが、自分の力に頼っている時には、力は湧いてきません。神の力に頼る時に初めて本当の力が湧いてくるのです。「弱き時に強し」とは、自分を顧みないでキリストに全托し、神の力に委ねてゆくことによつて可能になるのです。私に委ねてゆきなさい、私の思いはあなたの思いよりも高い（イザヤ書55章9節）と語られているとおりです。神の大業に参画できますようにお導きくださいとの祈りを持つて、常に最善を願つていてくださる主様に全てを委ね、天に通じている地上の旅路を、勇気を持つて歩みましょう。



前進あるのみ

—2015年2月22日 O姉召天3周年記念—

2015年2月22日

聖書朗読 コリント前書13章(全)

「これ、なんじら福音を弘ひろむることに与あずかるが故なり。我は汝らのうちに善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す。」(ピリピ書1章5〜6節)

コリント前書13章の実を体现されたO姉妹の信仰・希望・愛の祈りを主様が成就され、京都キリスト召団に新館(集会の会堂)が与えられました。

先生は、花婿キリストを待ち望む花嫁修業中の召団メンバー達への励ましの書簡として、ピリピ人への書(ピリピ書)を紐解かれました。

このようにハードウェアとソフトウェアが、天上から与えられましたので、地上における証人として、キリスト・イエスの心を心として世の光のごとく今の時代に輝く者として、「前進あるのみ」の祈りをもって進みましょう。

どんな状況でも恩恵に裏付けられた平安が在りますから、胸を張って地上の役割を果たし、咄つぶやかず疑わずして凡ての事を行うなら、必ず、主様からの護りと導きが伴います。

3月28日奈良召団の、4月5日京都召団の各特別伝道集会において、たくさんのお悩み苦しんでいる病める魂が、真理・愛・恵みなる救い主イエス・キリスト様に贖われ、新生しますようにと祈ります。

私たちの集会は、見えないキリストを見えるように現わす集会でありたい。その実体がキリストの愛を証しする集会(エクレシア)であるようにと願います。

私たちの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安とが、皆さまに豊かにありますように！



天国はその人のものなり

2015年3月2日

聖書朗読 マタイ伝4章12～25節

今回、聖書朗読でマタイ伝4章16節

「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

に出会い、キリストの福音伝道はここが出発点なんだと分かり、また、自分を含め人は誰でも本来このように憐れむべき姿なのだと理解しました。主からの祝福を当たり前のこととせず、主からの試練を自分の成長のチャンスと捉え、主にすがり主から力を頂き、主に感謝しつつ精進することが我々に相応しいことだと思いました。

以下、集会で語られた内容を抜粋してお伝えいたします。

どん底でしか、キリストの有難さは分からない。この世に死んでいますか？

こちらの感情に関わらず、

「キリストが我々を負い運ぶ」（イザヤ書46章4節）

の聖言に委ねる。

「悔い改めよ」（マタイ伝4章17節）

は、方向転換せよ。赤ちゃんのようにゼロに戻って。

「心の貧しい人々は、幸いである。天国はその人たちのものである。」（マタイ

伝5章3節）

「自分の中には根底から支え活かすものが何もない、それに気付く者は幸いなんだよ。人が埋めることができない孤独や淋しさを知る者、そんなお前にこそわたしが必要のだよ。わたしはお前と一緒にいるよ、そこが天国だよ。」

と。聖書の御言葉の受け取り方は、その時々で違って構わない。固定化して考える必要はない。聖書の御言葉や描かれた情景に自分を置いて読む。自分に関わるものとして読む。御言葉を客観的な解釈で窮屈に考える必要はない。

「天の父は、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような他によりすぎるものがない者に、これらのことをお示しになりました。」（マタイ伝11章25節）

「父の他に子を知る者はなく」（マタイ伝11章27節）

キリストも、世の中の人たちの中で孤独や淋しさを味わっておられた。キリストだけが特別で、孤独や淋しさも知らず、人の気持ち分からない、というような方ではない。

「重荷を負う者、我に來たれ。我、汝を休ません。」

キリスト自身が重荷を負い、苦勞しておられた。だから、「私（キリスト）と一緒に生きれば、不思議なことに重荷が単なる重荷ではなく、違ったものになるよ。それが天国だよ」と。



汝はわが僕、われ汝を強くす

2015年3月8日

聖書朗読 イザヤ書41章8～16節

春が来たりつつある。鴨川べりの柳が芽吹き、ユキヤナギが小さな白い花を付け始めた。暖かい日は、川沿いのベンチで談笑する人が目につき始めた。

今日の講筵は、イザヤ書40章から43章を中心に学んだ。私たちの集会は、御言を学ぶにあたり、この御言が今の私たちに何を伝えようとしているのか、何を約束し、如何なる励ましを届けようとするのかを重視している。御言の意味ではなく、現代に生きる私たちの生活や魂、体験などに引きつけて御言を読み、具体的、実践的な力となるような御言の学びを目指している。奥田先生は、イザヤ書を読むと心が天的次元に広がり、力が出、意気盛んにしてくれると言われた。そして今日のイザヤ書は、集会に連なる皆さんはもとより、京都キリスト召団にとつても、これを鼓舞し、力づける箇所として受け取りたいと語られた。以下、印象に残った処を書いてみる。

① イザヤ書40章3節にある「野」、「砂漠」を、現代日本の浅薄で表面的な魂の状況と考えると、キリストと直結し、地上を超えた霊の生命^{いのち}を頂いた私たちは、「福音の原点——『愛』に根ざして生きる——」を同胞に伝える使命がある（今回の公開講演会）。

② 「疲れたる者には力を与え、勢力^{いきおい}無き者には強きを増し加え給う。

主を待ち望む者は新たなる力を得ん。走れども疲れず……」（イザヤ書40章29

～31）

とあるが、これは皆さんと集会に与えられた「応援歌」と受け取ろう。

③ イザヤ書41章8節～16節では、

「我が僕イスラエルよ、我が友アブラハムの裔^{すえ}よ」

と親しく呼び掛けて頂いた私たちに、繰り返し、主の大いなる励ましと力添えが約束されている。

④ イザヤ書42章、43章にも、主が私たちを選び、御霊を与え、共に居て護り、異邦人の光と為すなど、祝福を約束してくださっている。キリストは、旧約聖書の約束を成就してくださった、そのことをしつかり受け取っていいこう。

先生は、高い次元からイザヤ書を深く受け取り、力とされている。午後からの野球出場のこともあり、楽しそうに話す先生の言葉に、聴く私たちも大いに力づけられた。



平凡な日々の中での感謝と讃美

2015年3月15日

聖書朗読 詩篇103篇

先生は、今日の筵題は、昨夜、大阪からの帰りに京阪神宮丸太町の駅を出て鴨川の対岸の我が家を見た時、「今日もわが家は無事だったのだ」との感謝の思いがこみあげてきたからであると、筵題の由来を説き明かされました。そして、その感慨にふさわしい聖書の箇所が詩篇103篇であると、同詩篇を中心にして、イザヤ書の重要な箇所を引用して講筵されました。

日々の生活は、常に危険を伴っていますが、一つ一つが主の守りの中にあることに感謝せざるをえません。様々な出来事があっても、主にあっては、根源的には解決されて健やかにされているという事態を受け取ってゆくことが大事です。主様を頂くことは、イザヤ40章31節、103篇5節のように、主様から力を得て、常に前向きに生きて行くことです。主様は、頼ってくるものを決して拒まれずに守ってください、力と希望を与えてくださいます。主様の愛は、親子の情愛より深いものです。

私たちが、キリストを通して神様の憐れみや導きに出会わなかったら、詩篇103篇15、16節のような事態になっていたでしょう。人は、どのような業績や地位があつたとしても、この世の原理や尺度に頼っている限り、最後まで生き生きと生きることとはできません。自然的生命には、必ず終わりがあります。神様の霊を受け、それに相応しい衣を着ないと、人生は儚いものとなります。すなわち、主様を知らなかったら、主様と繋がらなかったら、人生は虚しくやりきれないものとなるのです。反対に、神様を知り、神様の霊が宿ると、魂に平安と喜びが訪れ、本当の幸福が頂けるのです。

改めて申し上げます。全てのことが当たり前のように見えますが、当たり前のこと何一つないのです。主様の守りの中にあるからこそ、全てが当たり前なのです。これを思うと、日々の生活の中には、感謝すべきことがたくさんあります。それを思い起こすことによって、平凡な日々の中で、主様との深い繋がりを再確認してください。そして、平凡な日々の中で、感謝と讃美を捧げてみてください。私たちが、このような生き方をするのが神の栄光となるのです。主様から新しく賜った人生は、栄光の器とされて、キリストの僕として生きることにあります。

引用された聖書：詩篇3篇5、6節、4篇8節、121篇、イザヤ44章1～4節、8節、21～23節、45章7、8節、12節、21、22節、46章3、4節。



主キリストはわが牧者

2015年3月22日

聖書朗読 詩篇23篇(全)

先生は、聖書の副読本としてヒルティの『眠られぬ夜のために』を推奨されました。

1月3日 たえず何か有益な仕事をし、あせつたり心配したりしないこと。

1月5日 完全に神の導きに身をまかせること。

1月8日 最善が定められてであると固く信じること。

1月9日 慰めは、苦しみのすぐかたわらにある。

1月14日 常に前方を見よう！

1月21日 祈りに特別の時刻も形式も不要、ただ心に思うだけで十分だ。

1月22日 朝、目覚めると感謝から始めましょう。

1月31日 どんな事情のもとでも、また、だれでも手に入れることのできる幸福を知ること。そして、常に喜びをもって心を満たしてくれるような幸福をもたらすものは、ただ

神への信仰、神のそば近くにあることの実感および有益な仕事だけ。

2月13日 神の霊の宿りをこの世のあらゆる財宝にまして重んじるならば、幸福となる。

2月15日 見えない世界を「信じる」ことによつて歩くか、日常の世界を「見る」ことによつて歩くかによつて、人生は違つてくる

7月10日 神のそば近くにあることこそ、人間の幸福の真髄。幾らかの悲しみも伴う。

7月12日 人生の目標とは、全く自由な、しんから気高い性質の人間になること。そのためには、神に仕えることがすべてだと自覚すること。

7月14日 マタイ伝6・33〜34、日々その務めと力とが自ずと与えられる。これが平安な生活をもたらす、そして最も確かな道。

7月15日 信仰とは、神に己を委ねること。神が我々の門を叩かれる。それを開くこと。

7月16日 他人に任せてよいことは、他人に任せよう。

新聞の「人生案内の相談と答え」を超えた人類の取り扱い説明書である聖書に聴き、まづ実践してみましよう。さらば道ひらかれ、もはやいろいろと思わずらうことなく、この世の命を超えて、かなたに希望をもつて、恵みの告白をすることができます。



キリスト道講演会

——「奈良」から「京都」へ——

2015年3月29日

聖書朗読 コリント前書2章(全)

昨日は、奈良で講演会が開催されました。小さい群れの奈良召団が今年で7回目となる講演会をされたことに心から敬意を表します。「奈良」に触発されて「京都」でも、来週、午前の復活節集会の後、午後に「キリスト道講演会」が持たれます。講演会は、先生のお話を中心ですが、ともに伝道をしているとの気持ちを持って、一人ひとりが、友人知人を誘うことによって、キリストの恵みを告白し、自らも伝道の一翼を担っていることを世に示す機会でもあります。

日本でキリスト教が受け入れられにくいのは、聖徳太子以来、仏教の伝統が根付いているので、キリスト教がなくても、心の支えになる宗教はあると考える人が多いからだと思います。その中でキリストを伝えるには、聖書において啓示されている神は、今も昔と変わらずに働いておられること、私たちは主イエス・キリストに護られ、導かれているが故に、どんな逆境や艱難の中でも、生き生きと力強く生きていけることを示す必要があります。

旧約の律法(戒め)を完全に全うされた主イエスは、最も大切な戒めは、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる神を愛する」と

及び

「己の近く隣人を愛すること」

だとされました。ここに言われている「尽くし」とは、自分の内(中)が空っぽになるまで「出し尽くすこと」、自分の側には、もう何も残っていない状態を指します。それほどまでに神を第一とし、神一切で貫ける人がいるでしょうか。隣人を真に愛することに関しても同じです。生れながらのままの人間(これを聖書は「肉」と表現しています)では、不可能です。十字架上の主イエスの死において、この肉なる旧い「我」も共に死んでいることを、厳かな根源の霊的現実として祈りの中で受け取ることが不可欠です。その祈りが深くなれば、自ずと聖霊(主キリストご自身の分身とでもいうべきキリストの霊)が宿ります。この聖霊の宿りによって新生した「新しき我」はキリストと同じ思い、同じ心で生きたいと願います。そしてその願いは叶えられ、上記の大切な戒めが、ごく自然なこととして実践できるようになります。これは、内なる聖霊の御業で聖名を讃えるのみです。



京都キリスト召団の使命

2015年4月19日

聖書朗読 コロサイ書3章1～17節

2週間振りの今日の講筵は、4月5日開催の「復活節集会及び公開講演会」のいわば感謝集会だった。奥田先生は、3月28日（土）奈良での講演会を皮切りに、4月5日（日）京都での講演会、4月12日（日）東京新宿集会での講演会と、短期間に連続して3つの公開講演会に臨まれた。今日、先生は、3つの講演会を終え、あらためて、「京都キリスト召団の使命」と題して、概略、次のように語られた。

① 「手から手」・「ハートからハート」へ

京都の講演会開催にあたり、召団の兄姉が、友人・知人に講演会の案内チラシを渡したり、心を込めて参加を呼び掛けたりした。福音は、生きた人間が生きた言葉によって、「手から手」・「ハートからハート」へ伝えることが大事です。

② 「集会に集う一人ひとりが伝道者である」

京都では、過去20年ほど講演会を開催して来なかった。しかし、昨年、新しく祈りの拠点（「新館」のこと）が与えられ、日曜集会後も時間に制約されることなく準備に当たることが出来るようになった。そのことで、講演会開催の態勢と、新しい人を受け入れる準備が出来て、「受け皿」が作られたと思う。今や、一人ひとりが伝道者の自覚を持ち、内側にキリストのいのちの生命を頂いて、「福音体」として生きることが大事である。そのために、日々の心身の鍛錬と御言の学びを、将来のための投資と考えて実行して欲しい。

③ 「日曜集会を大事にしよう」

祈りの拠点に生命を注ぎ込むのは、集会に集う一人ひとりである。集会での日曜ごとの祈り、御言の学びが特に大事である。京都の集会が、真の福音とその実践の発祥地・発信地となるように心掛けて頂きたい。

本日の集会に、京都の講演会に参加されたWさん（25歳、同志社大学ロースクール学生）が初めて参加された。皆さん、若き魂の行く道に、主の導きをお祈りください。



福音伝道と天賦天職

2015年4月26日

聖書朗読 エペソ人への書4章1～16節

私たちは、

「汝ら我を選びしに非ず、我なんじらを選び。往きて実を結び、その実の残らんために汝らを立てたり」

との御旨により召された者として、一方では「福音伝道」という使命を託されているとともに、他方では各人に賜わった天賦の才能・資質を活かして「天職」の自覚の下にそれぞれの仕事（職業という狭い意味ではない）に打ち込み、それが神・キリストの栄光となるようにとの祈りをもつて生活しています。奥田先生は、40歳になる年から今の集会を始められ、教育者・研究者としての大学での職務と、福音伝道、特に集会とをどのように両立させていけばよいのかで苦しみました。研究という仕事は、24時間それに没頭したとしても足りない無限のものだからです。集会の準備も、聖書の学びだけでも時間と労力を必要とします。所詮、両立し得ないことをしているのではないかと苦悩がありました。現在の集会員もまた、程度の差こそあれ、このような葛藤を抱えているのではないかと。仕事と家庭生活を全うするということが、福音伝道の一翼を担うということに、さほど困難を感じない境遇・環境の方は別として、福音伝道の使命を果たし得ていないとの負い目を感じている方もあるのではないかと、それが先生の関心事でした。

「福音伝道は、各人ばらばらに行うものではなく、「集会」がその担い手である。祈りをもつて日曜日の集会に参加し、御言葉・御霊の内住を賜わり、それをベース（土台）として祈り心で仕事に打ち込む。コロサイ書3章15～17節を実践することが、自ずと「福音伝道」に繋がって行く。祈りの中で主キリストに全托し、「御心を為させてください」との祈りがあれば大丈夫です。思い煩うことなく、日々、主と共に生き生きと生きてください。」

これが、本日のメッセージでした。

「自分は、こんなキリスト様を宿しています」

「こんな素晴らしいものを味わいました。あなたもキリスト召団にお招きします」

「崩壊した家庭生活が、回復されました」

「無料の天国保険（イエス・キリストが賜わる永遠の生命の保険）に入りませんか」

福音体メンバー各人が、出来る範囲内で賜物を持ち寄ってエクレシアを築きましょう。



此の火　すでに燃えたらんには

2015年5月3日

聖書朗読　使徒行伝1章1～14節

宇和島に転勤されたH姉から手紙が届きました。その中で、

「たんぽぽを見ると、『たんぽぽになれ』という主のみ声が聞こえるような心地がします。自分のまわりに小さな種を送り出せるよう聖意体现を地道にやってゆきたいと思います。」

との箇所が印象的でした。宇和島の地に蒔かれた種が大きく開花することをお祈りします。今週は、先週語られた「福音伝道」を実践してゆくために必要不可欠なのは、何であるかについて語られました。そして、

「伝道のために必要なものは、何よりも聖霊なのです。」

と講筵を続けられました。ヨハネ伝20章19節から22節にあるように、福音伝道の使命を担うためには、聖霊の火が一人ひとりの内に燃えていることが必要です。集会の姿は、整った仲良しクラブではなく、各人が自分の枠から外れた「破れ」において、聖霊の火が熱く燃えているという姿であるべきです。

聖霊が降臨するための秘訣は、使徒行伝1章14節にあるように、唯ひたすら祈って聖霊降臨の準備をすることです。そして、聖霊降臨のために必要な祈りは、常に目を覚まして祈り待ち望むという忍耐の祈りです。

聖霊（御霊のキリスト）が臨めば、運命環境がどのようなものであってもそれを乗り越えて、主の証し人として活動できるようになります。私たちの日常生活は、何をするにしても、この聖霊の火がないと本当のことはできません。常に聖霊の火をいただき、日々、新しくされることによつて、苦難を突破して前進また前進の未来が開けるのです。

一人ひとりは、キリストの命がかかった尊い存在です。キリストの中にあれば、古い自分分は消え失せ、キリストの命を宿して常に新しく生きてゆくことができます。御霊の主キリストを宿し、自分に死んで日々新たに作り変えていただくと、表面的には苦難があつても、根底においては支えられています。そして、たんぽぽが隙間に咲くように、各人が置かれたところで花を咲かせることができます。



御霊と能力との証明による

2015年5月10日

聖書朗読 コリント前書1章18節～2章5節

5月10日は母の日。天にある京都召団「集会の母」を思う。そのいずれも優しい眼差しに育まれて、多くの若き魂が平安を戴いてきた。

京都召団の聖霊降臨節（ペンテコステ）集会は、1週間早めて5月17日に行うこととなった。今日の講筵は、ペンテコステに向け御霊の導きを願って、コリント前書を中心に御言をいただいた。奥田先生が力を込めて話された処を、以下に書いてみる。

まず、コリント前書1章から2章。

「十字架という事実が語りかけている言葉は、救いの道を歩かせていただいている私たちには、神の能力ちからである。」

と読みたい。パウロは、コリントへ宣教に赴いたとき、弱っており、恐れに取りつかれ、ひどく不安な状態であった。しかし、イエス・キリスト、しかも十字架に釘けられたこのかた以外のことは何も知るまいと心に決め、

「御霊と能力みたまちからとの証明により」

伝道を行った。現代に生きる私たちも、日々の仕事や営みにおいて、健康面などの不安や心配事が襲ってくる。その中で、主は私たちに

「お前の能力ではないよ、私（主キリスト）だよ。必要なものは私が与えるから、

御霊の能力によって雄々しく歩みなさい。」

と励ましてくださる。自分自身から外されて、主の導きに委ねることが大事。

続いてガラテヤ書3章とヨハネ伝14章から17章。聴きて信じた私たちは、十字架、聖霊の原点にいつも立ち帰ること、そのために祈りを大切にすること。キリストと父なる神様が、いつも一つであったように、今度はキリストが私たちと一つになって働いてくださる。そして、私たちを使って神の栄光を顯すよと言ってください。

このように、どんな働きをしても、主と一つとされて、御霊の能力に依り頼み、ピリピ書4章6節～7節の御言に信頼して過ごすこと、これが「御霊と能力との証明による」生き方なのです。

5月末に御殿場「東山荘」で開催されるキリスト召団福音特別セミナーに、今年は京都から奥田先生の他に5名、奈良からは4名が参加予定と聞く。先生から主題が与えられており、「各召団の使命と各人の課題」が問われている。祈り心で準備したい。



聖霊のバプテスマ

2015年5月17日

聖書朗読 使徒行伝2章1～21節

若葉の美しい爽やかな朝、2015年の聖霊降臨祭集会がもたれました。

先生は、使徒行伝の重要な箇所を読まれながら、現在を生きる私たちにとって、バプテスマを受けること（洗礼）の意味について語られました。

教会では、入信した時に、身体を水の中に浸す儀式をバプテスマと言っています。その儀式は、水の中に沈められることが古い自分の死を表し、水から上がったときに新しい命に生きる身となった事を表しているとのことでした。

そのような儀式を持たない私たちにとって、バプテスマを受けるとはどのようなことでしょうか。私たちにとつてのバプテスマとは、形のある儀式ではなく、キリストの十字架を瞑想して、自分の存在そのものをキリストの中に投げ入れることです。

「キリストの御名によるバプテスマ」

とは、十字架されたキリストの中に自分の全存在を投げ込むこと、自らは真の悔い改めすらもできない私たちに代わって十字架に架かって贖罪を全うしてくださった主イエスに托身することです。そして、喜びも悲しみも含めて自分の人生の全てをキリストに預け、

「主様、あなたに托身しないと、私はどうすることもできません。」

という祈りを持つて日々キリストとともに生きることです。そうすると、キリストが一人ひとりに現れて、

「私は、あなたの罪を背負った。あなたの全てを引き受け、全存在を支える。安心

して私に托身しなさい。」

と励ましてくださるのです。

試練や艱難に遇った時に、自分の力で進んでいる人は、行き詰まることはありませんが、聖霊の力で進んでいる人は、それを乗り越えて行く力と希望が与えられます。キリストの力を無限のものと信頼して托してゆくと、聖霊の働きによって、与えられた日々の仕事や役目が質的に変わってゆき、無学の凡人ただひとのようであっても、キリストの栄光を現す器とされてゆきます。忍耐強い祈りを通してキリストに直結し、日々、聖霊のバプテスマに与りつつ、主様から与えられた使命を果たすことが神様の愛に応える道です。



聖霊の賜物

2015年5月24日

聖書朗読 ヨハネ伝15章1～17節

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。汝ら我に居り、我また汝らに居らば、多くの実を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも為し能わず。」（ヨハネ伝15章5節）

集会の一人ひとりが真の葡萄樹なるイエス様にしっかりと繋がって居れば、同じ樹液（聖霊）が環流するので集会（召団）は、互いに相愛する実に溢れるエクレシアに成長します。

この自由で精妙な、敏感とさえ言いたい樹液の絶えざる助けを賜わると、あらゆる真理を悟り、何ともいいようのない生の喜び、つまり人間やものごとに対する恐怖からの解放や、地上の幸福の大部分を成している憂いなき境地に至り、興奮をとまなわなない、一種の火のような情熱と生気をともなう権威を有する霊止^{ひと}に成ります。（ヒルティ『幸福論（第三部）』岩波文庫の「孫たちに幸いあれ」の293頁、300頁、参照）

この聖霊は父なる神が御子キリストを通して私たち一人ひとりに、そして集会に賜う最大善のプレゼントです。この賜物を豊かに頂くために主にある兄弟姉妹——霊止^{ひと}の群れ——による祈祷会を新館（集会室）において復活させましょう。

火に満てる御霊よ、疲れを知らず 時と所とに妨げられぬ御霊よ、眠り込みし者を呼び覚まし、求める者を港へ導き給え。

生命を失える冷たきキリスト教をすべてまた熱くし給え。



テサロニケ教会における信、愛、望

2015年6月7日

聖書朗読 テサロニケ前書1章

5月末、御殿場市のYMCA東山荘で、キリスト召団福音特別セミナーが開催された。参加者は31名で、京都、奈良からも合計10名が参加した。セミナーの主題は

「福音伝道における各キリスト召団の使命と各人の課題」

奥田先生は、セミナーでの講筵及び早天祈禱会などで、熱く、時に厳しく、情熱を込めて語られた。参加した兄弟姉妹は、いよいよ「十字架・聖霊」を旗印に、主キリストの福音のために前に向かつて進もうとの点で、思いを共有出来たと考えている。本日、セミナーに参加出来なかった方に、セミナーで使った参考資料、講筵メモが配付されたが、京都キリスト召団の集会に連なる各自が、これらの資料を再読、精読されるようお勧めする。

今日の講筵は、テサロニケ前書1章から3章までを学んだ。奥田先生はここを読んで、パウロとテサロニケ教会の人たちとの愛に満ちた関係に感動したと話された。テサロニケで伝道に当たったパウロは、自ら育てた兄弟姉妹が、パウロが帰ったことで福音から離れ、その労苦が虚しくなったのではないかと心配していた。パウロは、テモテをテサロニケに遣わしたところ、戻ってきたテモテの報告は、とても喜ばしいものだった。この箇所を生は、テサロニケ前書1章3節の

「信仰のはたらき、愛の労苦、主イエス・キリストに対する望みの忍耐」

の御言を引き、英文聖書、フランシスコ会訳聖書を参考にしながら、次のように話された。

「テモテの報告は、テサロニケの兄弟たちが、生活の中に信仰を実践し、愛に伴う労苦に耐え、主キリストへの希望に支えられ堅く立っているというものでした。患難の中で、信、愛、望を貫いていることを聴き、このことがパウロを元氣付け、慰め、喜ばせています。また、テサロニケの人たちが、パウロの言を人の言とせず、神の言として受けてくれたことに、パウロは心から感謝しています。伝道者の大きな喜びは、福音のため蒔いた種が育ち、花を咲かせ、多くの実を付け、その実が熟成することです。京都キリスト召団の一人ひとりが、置かれた処で花咲き主に在って堅く立つことが出来るよう、京都キリスト召団への応援歌としてテサロニケ前書1〜3章を受け取りました。」

と。



相互の愛および凡ての人に対する愛

2015年6月21日

聖書朗読 テサロニケ前書3章11～13節、4章9～12節

梅雨の晴れ間の2週間ぶりの集会でしたが、多くの方が集われました。

S姉は、先生ご不在の先週日曜日に、K、M、I姉とで持たれた集会が恵まれたものであったことを証言されました。これについて、先生は、集会員が祈りの家に自然に集まって、温かいものが流れるような集いが持たれることにこそ、新館を作った意義があるとの感想を述べられました。

今日の本題は、テサロニケ前書3章12節

「相互の愛および凡ての人に対する愛を増し」

でした。主様から一人ひとりに、そして集会に注がれる愛は、決して、集会内だけに留まる閉ざされたものではなく、自ずと外に流れ出ざるを得ないはずです。私たちは、主様から「十字架の愛」をいただきました。そして、

「我、主と共に十字架せられたり。もはや我生くるに非ず、御霊のキリスト我

が中に生き給うなり」

との霊的現実を根底に据え、主様が示されたのと同質の愛を実践することが必要です。具體的には、たとえば、試練の中にある人、艱難の中にある人に会ったときは、その人のために、祈り、励まし、希望を与えること。

祈るときは、聖書の言葉を抛り所として、私を通して御霊の命がその人に流れ込みますようにと心を込めて祈ります。

励ますときは、聖書の命の世界は、自分だけではなく、多くの人が体験している現実の世界であることを語ります。

病の人には、神・キリストが最善をなしてくださること、苦難を通して必ず栄光が与えられると希望を語ります。

そのためには、自分の目で聖書を読み、聖書の現実を体感し、聖書の言葉に共感することです。常にそのような心構えで聖書に接しているなら、悩める人や困っている人に出会ったときに、聖書の言葉が直ちに溢れ出て、自分の言葉でこれらの人を励まし、道を示すことができるようになります。

テサロニケ前書は、京都キリスト召団に対する応援歌でもあります。



詩篇および新約聖書と「祈り」

2015年6月28日

聖書朗読 詩篇27篇

本日、奥田先生作成の「2015年夏季福音特別集会（京都）のご案内」が配付された。今年の特別集会の主題を「祈り」とし、「旧約・新約両聖書と『祈り』」としたので、特別集会の準備として、祈りの箇所精読と学びに取り組んで欲しいとある。

今日の講筵は、その「祈り」の箇所から、始めに創世記24章の「アブラハムの老僕の祈り」を学んだ。アブラハムの命を受けた老僕が、遠いアブラハムの故郷へ行き、息子イサクの嫁選びをする感動的な場面である。老僕は泉の傍らで先ず主に祈り、自分とラクダに水を飲ませてくれるよう町の娘に頼むこととし、快く飲ませてくれる娘をイサクの嫁に決めた^いとする。その場に來たりリベカが老僕の願いに応えて水を飲ませてくれた。老僕は、主が旅路を導き、主人アブラハムの一族の家にとどり着かせてくださったことを感謝して祈る。食事が用意されたが、老僕は旅の目的と用件を話し終わるまで頂くわけにはいかな^いと言^う。リベカの父及び兄の返事は、

「このことは主の御意志ですから、わたしどもが善し惡しを申すことはできません。リベカをお連れください。」

というものだった。老僕の祈りが素晴らしいが、

「お前はこの人と一緒に行きますか」

と尋ねられたリベカの返事も素晴らしい。直ちに

「はい、参ります」

詩篇第27篇、第62篇等のダビデの歌や福音書からも「祈り」を学んだ。先生は次のように話された。詩篇の祈りは敵や仇あだからの護り、罪からの解放が主内容となっている。しかし私たちは、主キリストの祈りの姿に学び、キリストへの讃美を祈りのベースとしたい。今あるどんな問題もキリストが支えてくださっていることを信受し、小池先生の言われた

「人生の目的は神讃美です」

を腰に結び、「聖意体現」の心根で、

「主キリスト様、あなたの御意を、私を通して為してください」

と祈っていき^{たい}。「信仰、希望、愛」を根底から支えるのは「祈り」であるから。

集会に連なる兄弟姉妹に、病と立ち向かっている兄弟姉への祈りをお願いしたい。

M兄、T姉、K兄、I君、H姉、U姉、N兄のお母様。



詩篇および新約聖書と「祈り」(第2回)

2015年7月5日

聖書朗読 テモテ前書1章12〜17節

「而して我らの主の恩恵は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るるばかり^い彌増せり。」(テモテ前書1章14節)

本日の講筵は、詩篇および新約聖書と「祈り」(第2回)でした。

先生は、祈りの本質を解かれました。

「だから、の祈り」

と、

「い、にもかかわらず、の祈り」

について詩篇第3篇から第6篇まで懇ろに解説して頂きました。

真の祈りの生活は、自分が正しいから助けを獲得する資格がある、というのではなく、ただ、神の慈しみ、一方的な憐れみだけに依りすぎるほかなし、汝のいつくしみの故をもて我を助けたまえ、の心根からの祈りに支えられた生活です。助けてもらうだけの正当理由がなくとも、現象面がどうであつても、世を突き抜けた世界を身に体して祈ると、天地がひっくりかえつても揺さぶられない喜びと感謝に溢れます。

イエス様は、何処にありましても、わたしたちをどん底から救いあげ担いあげ、本当の世界に生きることを示してくださり感謝です。



詩篇および新約聖書と「祈り」(第3回)

2015年7月19日

聖書朗読 詩篇121篇

夏季福音特別集会在1か月余りに迫り、先生のご講筵は、その前哨戦といえる内容になって来ました。「特別集会のご案内」で予告されているように、今年の目標は、旧約聖書と新約聖書を通して、私たちの信仰生活にとって最も重要な「祈り」を体得することが掲げられました。今日は、聖書の次の重要な箇所をたどりながら、詩篇と新約聖書の中に現れている「祈り」の本質について語られました。

詩篇23篇、詩篇27篇、詩篇91篇、詩篇94篇、詩篇103篇、詩篇119篇1、9、19、71、81、105、114、130、147節、詩篇130篇、テモテ前書6章11節以下、テモテ後書1章10節。

先ず、最初に大事なことは、「祈り」とは、主観的な願望ではなく、御言葉を抛り所にし、御言葉が支えとなっている、神様との対話であることです。

御言葉に土台を置いた祈りでないと、祈りは結果の成否を求めるものになり、結果を見るまでは疑いを持つことになります。しかし、「祈り」の中で、自分を十字架のキリストに委ねる(全托する)、霊と真をもつて祈る、命がけの祈りをする、祈ったことはキリストに聴き届けられ、必ず成就します。私たちが愛しておられるキリストは、それだけの實力を持つておられるのです。

人は、苦しい状況にある時に何を支えとするか、逆境の時に何を信じて生きるか。苦境の時、艱難の時に、見えない守りを信じて希望を持ち、それを耐える人は幸いです。極限的状况にあっても、御言葉によつて希望を抱いて祈る人は、幸いです。シベリア抑留の時も、生還できた人とそうでなかった人の分岐点が、見えない守りを信じて生きたか否かであったと言われています。主様に全托する祈りを持つか否かで、極限的状况にある人生も、全く違った様相を呈してくるのです。さらに、他者のために祈ることも大事です。

「正しき人の祈りは、働きて大いなる力あり」

とヤコブ書5章16節にあるとおりです。



使徒行伝と「祈り」

2015年7月28日

聖書朗読 使徒行伝9章31〜43節

久しぶりに聖日集会に参加しましたが、私自身が充実してきたこともあると思いますが、それにしても集会の人たちは心が豊かだなあと感じました。キリスト自身は、もつと素晴らしいのですが、質的に同質なのだと思います。

サタンとその手先になった人は、全てを与え尽くして十字架に架かられたキリストとは真逆の利己的な存在だとしても、我々はそれに吞まれることなく雄々しく勇敢に生きて、キリストの実力・迫力をもつて勝利し主を証しする使命があるのではないのでしょうか。

奥田先生は「祈り」をテーマに、使徒行伝に出てくる弟子たちの主にある者の生き様を伝えてくださいました。

キリストの初代の弟子たちは、心碎かれた姿勢でひざまずいて主に祈り、亡くなった姉妹を生き返らせたり、迫害され投獄されても、天使の助けによって鎖が外れて助け出されたりしています。

我々が本当に主に祈り求め、その祈りが主の御心に適い、主が我々を通して働かれる時、この世の常識では理解できないことが起こります。大事なことは奇跡が起きるか否かではなく、真剣に生きる中で主に依り頼み、主から力を頂いて生き、働くことだと思います。

奥田先生は

「現代では御言葉に基づいて祈ることが大事」

と言われましたが、私はそれを

「現代の我々は、聖書を通して主の御言葉と行い、また主にある弟子たちの生き生きとした力ある働きを知ることができるので、聖書の御言葉に基づいて祈ることが確かな祈り方だ」

という意味に受け取りました。

先生は「今日話したい所」として使徒行伝12章20節の「ヘロデ王の最後」を紹介されました。ヘロデ王はその栄光の座を神に帰さず、自らを神としたために主の天使に撃ち倒され、蛆に食い荒らされて息絶えました。地位や名誉を求めてそれを得たとしても、その結果、「自分は選ばれた優れた人物である」と勘違いをして自らを神とすれば、神はそれを決して許されないという話です。

我々は悪に心悩ますことなく、地道な祈りの中で主の証し人となって働き続けることで、主の御心が地にも行われることを願いたいと思います。



パウロの伝道旅行より

——ピリピとミレトにて——

2015年8月2日

聖書朗読 使徒行伝20章17～38節

今日の講筵は、パウロの伝道旅行から、使徒行伝16章と20章にあるパウロの祈りの姿に目を向けた。

16章では、パウロがピリピにおいて、占いの霊に取り付かれていた婢女に、イエス・キリストの名によりて命じ霊を追い出した。その婢女の主人らは、利を得る望みがなくなつたとしてパウロらを捕え、不当にも投獄してしまつた。パウロとシラスは、獄中でも神を讃美する祈りを捧げ、囚人はそれを聴いている。大地震が起こり、獄の戸が開き、囚人の鎖が外れても一人も逃げ出さなかつた。獄守は、これらの出来事に心を打たれてパウロの前に平伏すが、パウロは、

「主イエスを信ぜよ、さらば汝も汝の家族も救われん」(使徒行伝16章31節)

と諭す。獄守は、パウロとシラスを自宅に招いて愛餐のひとときを持つ。この記事を読んで、主を信じて喜ぶ全家の様子が目に浮かぶが、獄中でも祈って神を讃美しているパウロの姿に感心させられる。

20章は更に感動的な場面である。パウロは、ミレトにおいてエペソの長老たちに、3年間にわたる伝道を終えるに当たつて切々と別れの言葉を語る。エルサレムに往つても投獄と患難が待っているが、パウロは前進して止まない。長老たちに

「われ今なんぢらを、主及びその恵みの御言に委ぬ。」

と伝え、

「与うるは受くるよりも幸福なり」(使徒行伝20章35節)

との御言を残し、跪きて一同と共に祈っている。

奥田先生は、この箇所ですべてのように話された。

「この箇所は読むたびに心を打たれます。パウロは、神の恵みの福音を証しする職^{つとめ}を果たすためには、生命^{いのち}をも重んじないと言っています。パウロのダマスコでの体験が原動力となつていいます。私たちは誰でも、『福音伝道』と『この世の仕事』の二役を担っています。この二つにおいて使命があり、主の栄光が現れてくださいとの祈りで取り組みます。原動力は『主の御言、御霊』です。私たちもパウロの勧めに従い、受けた恵みを流す人になりましょう。」

夏の特別集会での講演会チラシが出来上がった。友人、知人にお届けください。



わがすべてのすべてなる主イエス・キリスト」

——夏季福音特別集会感謝集会並びに故O姉召天二周年記念——

2015年9月6日

聖書朗読 コリント後書4章5〜18節

「我らは己の事を宣べず、ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの僕たる事とを宣ぶ。」（コリント後書4章5節）

「主は、我が命、我が喜び。主はすべてのすべて、いのちのいのちであります。」

と奥田先生は、告白されました。そして、これが

「讃美であり、感謝であり、祈りです。」

と。

主様が、夏季福音特別集会を祝福し導いてくださり、伝道講演会に集われた一般参加者20名の方々に無くてはならぬものをお与えくださり、思いに勝る恵みを賜りました。

夏季福音特別集会の主催者は、イエス・キリスト様であられ、イエス様から全てが流れてきます。

主様が、霊界に在って、この世に御霊（みたま・聖霊）となつて多くの悩み苦しむ者一人一人を助けようとして、祈つて執り成してくださる御心が、キリスト召団を通して完全に働きますように用いたまえ。旧約の「義と愛」が流れ入ったガリラヤ湖であられるイエス・キリスト様から流れ出る「永遠の命」（愛）の真清水を、ヨルダン川であるキリスト召団を通じてこの世に顕し、差し出し、分かち合つて行けるように、働かせてください！

実りの秋、伝道の秋にイエス様に用いられる僕であることを喜びましょう。

今回の感謝集会では、奈良召団のK夫妻、K姉、M兄が、次々と喜びに生きる証しをなさいました。



わが主キリスト

2015年9月13日

聖書朗読 詩篇84篇

夜、耳を澄ますとあちこちから虫の音が聞こえる。小さな虫たちが、あのような心地良い鳴き声を出す不思議さを思う。秋が来つつある。

今日の講筵は、詩篇84篇を中心に、詩篇から、祈りの御言、讃美の歌を学んだ。奥田先生は、詩篇の中での「神」、「エホバ」は「主キリスト」と置き換えて読み、詩篇の中に自分の祈りを見つけないが読むと、読むことが即、祈りとなる、と話された。

また先生は、詩篇の時代との違いを次のように話された。

「詩篇の時代は『義なる神』に、『義でない人間』は、ただ神の『憐れみ、ゆるし』にすがって祈るしかなかった。それでも、祈りは讃美と共に信仰生活の支えであった。私たちの場合は、主キリストが十字架で私たちの『不義』を取り除き、ご自身の『義』を賜ったので、恐れなく、『子たるの霊』にあつて『主さま!』『主キリストの父なる神さま!』と親しく呼びかけて祈ることが許されている。『どんなことでも大胆に祈ってくるんだよ!』と待っていてくださる。このように、私たちと詩篇の時代とは祈りのスタートラインが違っている。私たちは臆することなく主の前に出て祈ることが許されており、同時に『主の僕』の自覚を深く持つことが大事である。パウロはピリピ書3章7節〜14節で、いかにもして主キリストと同じ姿、同じ体験（十字架の苦しみと復活の栄光体への変貌）をさせてほしいと熱望している。それほどまでに主キリストとの一如一体の相に徹したかった。私達もパウロの心意気に共感し、この身を主に捧げていきたいです。」

と、以下、今日取り上げた詩篇の中から、麗しい御言を書いてみる。

「なんじの大庭に住まう一日は、千日にも勝れり」(84篇10節)

「汝わが呼はりし日に我にこたえ、わが靈魂^{たましひ}に力を与えて雄々しからしめ給へ

り」(138篇3節)

「主は恵み深く、なさけにみち、また怒りたまふこと遅く憐憫^{あわれみ}おほいなり」

(145篇8節)

他にも23篇、46篇を力にしてください。

M兄は無事手術を終えて退院され、現在、自宅療養中です。M姉が手術のため9月28日入院(翌29日手術)します。お二人のため、お祈りください。



「神の義」と福音

2015年9月20日

聖書朗読 □マ書1章16～17節、3章21～26節

講筵の始めに先生は前回の「集会だより」（9月13日）を配布し、その要点を解説されました。詩篇の時代と私達とでは「祈りのスタートラインが違う」ということ、主キリストの十字架の贖いの福音が如何に恵み深い有難いものであるかを本日の講筵において、

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」（ロマ書1・17）

の聖句から説き起こされました。

「義」あるいは「神の義」は旧約聖書を貫くバックボーンを成すもので、ルターはこれを「裁きの義」であるとして恐れ、どんなに善行を積んで「神の求め給う義」に到達しようと努めても「神の裁き」を免れることはできないと苦悩の中に呻吟していたときに、この聖句に出会って心（霊）の眼が開かれ、「神の義」は「裁きの義」ではなく、「福音」即ち「キリストの十字架の贖罪」による「赦し」と聖霊による「新しい生命（永遠の生命）」を与える「救いの義」（愛）であることに気付かされたのでした。

人間は、生来、自我を立てる自己中心的な在り方（これを「罪」と言います）のため、神様の前に立てない存在ですが、このような私たちの罪を一身に引き受けてくださったのが主イエス・キリストです。

「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト（御霊のキリスト）我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり」（ガラテヤ書2・20）

私たちは、キリストによって「新生」を賜ったものの、「霊なる人」と「肉なる人」との闘いの中にあるので、常に目を覚まして祈り続け、聖霊のキリストに委ねていかなければなりません。私たちは主キリストの御意を求めてそれにかなう生き方、自分のために神を求めない、自分を神様に捧げて他者のために尽くすという信仰の在り方に徹することが大事です。

「神の義はその福音のうちに顕れ」

における「福音」とは、主イエスにおいて実現した神の御旨、御業、愛、そして主キリスト御自身のことです。午後は、京都西山霊園の「京都キリスト召団の墓」に多くの参列者が集われ、秋晴れの青空の下で、故・O姉の納骨式が執り行われました。



「旧約」と「新約」(ヘブル書より)

——大祭司イエス・キリストによる永遠の贖罪——

2015年9月27日

聖書朗読 ヘブル書11章13～16節、12章14～29節

主イエス・キリストは、一回限りの生贄いけにえ(犠牲)として、私たちの罪のために、御自身を神に捧げてくださり、永遠の贖いを全うされました。

「汝らの近づきたるは、活ける神の都なる天のエルサレム、……万民の審判主さばきぬしなる神、……新約の仲保なかつだちなるイエス及びアベルの血に勝りて物言ふ瀟々そそくさの血なり」(ヘブル書12章22～24節)

イエス様が十字架上で流された血は、復讐を叫ぶアベルの血ではなく、私たちの罪を赦し、罪咎の穢れを清める恵みに満ちた尊い犠牲の血でした。私たちの大祭司であるイエス様は、

「動物の血ではなく、御自身の血をもって永遠の贖罪(罪のあがない)を全うしてくださいました。そのおかげで、私たちは天界の聖なる神の御座(至聖所)に恐れなく入って行けるのです」(ヘブル書10章19～20節)

イエスが十字架上で大声に呼ばわって息絶えられた時に聖所の幕が二つに裂けたように、イエス様はご自分の体という幕を引き裂くことによって新しい命への道を開いてくださいました。私たちはこの道を通って、清い主様の前に出て喜びを込めて祈れることを有り難うございます。

古い祭司制度のもとでは、大祭司といえども自らを悪から守ることのできない罪ある弱い人間でした。しかし、神はそのひとり子を永遠の大祭司に任命されたのです。イエス様は不滅の御方なので、いつまでも大祭司であります。また、御自分のもとに来る人々を一人残らず、完全に救うことがおできになります。

そういうわけですから、主イエス様により天国の民として選び出された召団の皆さん、私たちの信仰の大祭司であるイエス様に日々目を注ぎ、その導きに全托しましょう。

奥田先生の懇ろな聖書解説の後、讃美歌136「血潮滴る主の御かしら」を合唱しました。



「見えるもの」と「見えないもの」

2015年10月4日

聖書朗読 コリント後書4章16～18節

今日の講筵は『見えるもの』と『見えないもの』と題し、私たちキリスト者は、どんなときにも主の導きに委ね、真に永続するものを求めて歩むことが大切であると教えていただいた。コリント後書4章にあるとおり、見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に至る。私たちが目に見える現実だけにとらわれていると、気分も先細りとなって暗くなり元気が出てこない。しかし、「見えないもの」、私たちを生かして止まない神様のご計画（ご配慮）に目を注ぐと、たとえ厳しい現実に直面していても、平安の中に導き入れられ、内なる人は活き活きと輝く。見えないものに目を注ぐ人となるには、キリストがニコデモに對して、

「見えない神の国（靈の王国）を見るためには新たに生まれること（靈的な新生）が必要である」

とおっしゃったように、御言と聖靈による靈的な誕生を要する。

「見えないもの」とは、見える現実の奥にある「真の相（本質）」のほかに、将来において神が約束してくださっている栄光がある。それをしっかりと受け取ることが大切。約束された祝福・栄光の事態を「真」とし、望み待つこと。

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」（ヘブル書11章

1節）

とあるとおりである。コロサイ書にも、

「（汝らの）生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なる

キリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」（3章3～

4節）

とある。ロマ書8章の全体が「見えない」靈の次元における根源的な恵みの現実の相を証示している。福音書も使徒書簡も、いや、実は新約聖書全体が、「見えるもの」に捉われることなく、その奥にある

「見えない、神・キリストの無限の愛（恵み）」

を体受して生きるようにとの励ましと祝福に満ちているのである（エペソ書3章16～19節参照）以上が今日の講筵の要約であるが、キリストの御霊を戴いた私たちは、「霊の眼」で「見えないもの」をしっかりと見て行きたいと思う。M姉の手術は無事終わり、これからリハビリ治療に取り組むとのこと。今後ともお祈りください。本日、K姉の誕生日でした。



汝は我が愛しむ子 わが悦ぶ者なり

2015年10月18日

聖書朗読 マタイ伝3章(全)

今日の集会は、福音書の中から

「汝は我が愛しむ子 わが悦ぶ者なり」

と記載された箇所をたどりながら、その深い意味を語られました。

この御言葉は主イエスが洗礼のヨハネからヨルダン川でバプテスマをお受けになった時に天から臨んだ祝福の御声であるとともに、山上での変貌に際して雲の中から語られた言葉でした(マタイ3章17節、17章5節、マルコ1章11節、9章7節、ルカ3章22節、9章35節)。

奥田先生は、

「主イエスが父なる神様にとって「悦びの存在」であつたように、自分も主キリストから「汝は我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」と呼びかけてほしい、自分も主キリストにとって「悦び(喜び)の存在」でありたいと切に願う」と告白されました。

「どんな立派なことをしたからではなく、存在そのものを喜んでいくと知れば、どんなに勇氣と希望が湧き出ることだろうか」

と語られたのです。福音書ではこの言葉は主イエスについてだけ記されていますが、旧約聖書イザヤ書40章以降では、主イエスの預言であるとともにイスラエル民族への将来の祝福として度々語られています(イザヤ書42章1節、60章15節、62章4〜5節、65章17〜19節)。

主イエスが神の前に自分を何者とも思っておられない平伏しの心の相^{すがた}を神は悦ばれました。主キリストによって罪赦され旧き我に死に、新生の命をいただいた(新しき靈なる人とされた) 私たちも主イエスと同じ「平伏し・従順」の姿でありたいです。私たちの存在を喜んでおられるという神様の声を日々聞いてゆくことによって、キリストと同じ姿に変貌する(コロサイ書3章1〜4節)との希望を賜り、コロサイ書3章12〜17節において神様が求めておられるような歩みを実現していくことができます。

なお、お祈り頂いているM姉は術後順調で、退院が近いようです。



日々の生活の中での神信頼

2015年11月1日

聖書朗読 エレミヤ書17章5～13節

二週間ぶりの本日の集会において先生は用意されたヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』の12月2日～6日を辿りながら、透徹した信仰の精髓を語られました。

とりわけ、12月5日と6日は貴重な内容を含んでいます。

「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。おおよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。彼は水のほとりに植えた木のように、その根を川にのぼし、暑さにあつても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ」（エレミヤ17章5、7、8節）〔12月6日〕

○地獄モード（生き地獄）・・・よくぶか爺さん型

- ・人間をあまり頼りとした時は、そのつど支柱をとりはずされる。〔12月6日〕
- ・人間を多かれ少なかれ恐れている。〔12月6日〕
- ・あくせく努力し、媚びへつらい、あるいはさらによくない手段を用いる。〔12月5日〕
- ・暮らしを支えるために朝早くから夜遅くまで身を粉にして働かなければならない。〔12月5日〕（詩篇127篇2節前半）

○天国モード（生き天国）・・・花咲か爺さん型

- ・日々の生活の中で神に信頼（ゆるぎない交わり）し、主の命令をためらわず、即刻、忠実に履行し、仕事を成し、隣人を助けるために賜物を正しく使用する者は、裏切られるなどの悲しい経験をしません。〔12月5日、6日〕
- ・人間を真に愛している。〔12月6日〕
- ・神およびキリストと共に生きることとは、この世での格別やさしい生き方であり、一種の無邪気な気軽さを生み出し、どんな享楽にもまして楽しい生活であり、無料〔12月5日〕
- ・すべて主な人生の宝が与えられる（仕事、生活費、よい結婚、友人、元氣、健康、必要な場合の休養など）〔12月5日〕（詩篇127篇2節後半、口語訳聖書による）

イエス・キリスト様は、異教の国にある私たちの全生活に昼も夜も目を留められ、眠られぬ夜のために時を過ごしている時には安眠できるように援護してください。

霊の糧に続き、水餃子とサンドイッチの愛餐会で交わりの時を共に過ごしました。



まず神の国と神の義を

2015年11月8日

聖書朗読 マタイ伝6章25～34節

ヒルティは、『眠られぬ夜のために』の中で、

「あなたがいつか本気に聖書を読んでみようという気になったら……まず、福音書から読み始めるがよい。そうすることはとりわけ大切であり、しかも誠実な人ならばだれにでも、まちがいをなく深い感銘を与える。」〔12月3日〕

「われわれは、すべての疑い惑える人や不幸な人、もしくは孤独な人たちにこう呼びかけたい。『ぜひ一度キリスト教を試してみなさい。』……しかし、ためすならば、最も誤りのない、最も単純なキリスト教でなくてはならない。…それは福音書に

記されたキリストの言葉であって、それ以外のものではない。』〔12月2日〕

と述べている（詳細は、11月1日の講筵）。今日の講筵で奥田先生は、ヒルティの勧めに従って英文聖書を参考に、マタイ伝からキリストの言葉を読み進んだところ、日本語では出ていない味のある御言葉として受け取ることが出来たと話された。確かに英文の語句、言い回しは、とても新鮮に思えることがあり、発せられた言葉の強さ、重さ、背景の大きさなども、日本語とは違った味わいがある。今日の講筵で話された英文の味わいは、先生が前夜、苦心して作成されたプリントを読んで頂きたい。

「人はパンだけで生きるものではなく」

の箇所で「cannot」を使い、パンだけで生きることとは「出来ないのだ」とし、

「神の語り給う一つひとつの言葉で生きる」

の箇所で「need」（必要である）が使われていた。先生はこの箇所で、パン（経済問題）は身体を備えた人間の生存に必要なはあるが、霊なる人（霊なる神に直結して生きる存在）には、何にもまして「神の言葉が絶対に必要である」とのキリストの御思いが表れている、と。また、

「神を試みてはならない」

を「Do not put your God to the test」（神様にテストを受けさせるようなことをしてはならない）との表現は味がある、と。また、マタイ伝6章31節から34節までについて、

「キリストが私たちのために全てのことを成し遂げてくださった。こちら側のマイナスを全部引き受けてくださった。いつもキリストの前にひれ伏していることです。ヒルティは、自身の体験から、日常生活の中でキリストの御言葉に賭けて行きなさい、と勧めているのです。」と。



霊言体受

2015年11月15日

聖書朗読 ヨハネ福音書10章1～18節

奥田昌道先生は、小池先生のキリスト新聞への寄稿文（1968年）を通して、本日の集会にキリスト道（使徒的信仰）の霊と生命を表されました。

その中から、福音のエッセンス十恵（十言）を拾い上げます。

- 1 万物をあらしめているあなた（神・キリスト）がいてくださるところが天国です。
- 2 霊を浴び、受霊してこそ生きうるのである。
- 3 ドラマの中で羊となつて受けとる（キリスト様も子羊となつたように観客ではなくドラマのプレイヤーにならないと霊的生命は得られない）。
- 4 無的実存（神のふところで祈っているひたむきな人）。
- 5 無力に徹すると無量の力に溢れる（聖霊という原始力を受霊しないで何の福音であるか、自分の力でやっても疲れるだけ）。
- 6 キリストの前に完全に兜を脱ぎ捨て平伏さないと入れない。
- 7 キリストの十字架は、万人を無条件に無私の世界に贖い入れる門である（あるがままの己を投げ出して祈ってこの門を透得する）。
- 8 「主よ！」と一言祈れば、聖霊の世界に入る（底力と底抜けの歓喜）。
- 9 信仰は、信交である。
- 10 霊言を体受すれば、聖書が身に付いて身分証明書となる。



功なくして神の恩恵により

2015年11月22日

聖書朗読 詩篇57篇1～3、7～11節

奥田先生は、18日にドイツの学生に対して行われた債権法の講義のために、体力、気力とも大変なご苦勞をされたにもかかわらず、通常通りの状態で集会を行われました。クリスチャンになった以上は、キリストの身代わりとして伝道する、キリストから命をいただき救いに与かったからには、それを分かち与えざるを得ないという使命感により、人間としての限界を超えて日曜日ごとの集会がなされていることを感じました。それには、聖靈のキリストがその原動力となつています。

最初は、詩篇57篇から、

「試練のない人生はありません。キリストの弟子になつたからにはキリストと同じ苦難を味わいます。しかし、艱難に出会つた時には、自分に頼らないで主に全てを任せてください。主が私たちに代わつて戦つてくださいます。主の御旨がかかつているので、必ず助け上げてくださいます。試練の奥に輝く光を見つめて進むのです。聖書は、本当の強さ、豊かさを与えてくれます。生活の中でキリストと共に歩み、主の栄光を現してください。」

と語られました。続いて、講筵題のロマ書3章24節を軸にして、ロマ書4章、5章の箇所から、次のように語られました。

「律法は神様の御心の具現として与えられたもののなのに、律法の奥にある神様の心を忘れて、自分の力で全うしようとし、自己の功績を誇り、その報いを求めるようになったために、律法は人間にとつて呪いとなりました。しかし、幼子の心で神の愛にすぎり、懷に飛び込んでゆく、神様の前に立つことのできない者を無条件に受け入れてくださる方にすべてを委ねてゆくという、打算を超えた在り方・生き方が、神の求め給う信仰の本来の在り方・すがたです。」

アブラハムは、最も大切なイサクを捧げるといふ神様の命令に敢然と従いました。キリストは、ゲッセマネの祈りで明らかなように、神様の御心のみを求め、神様の御心なるが故にと、忠実に無条件に従うことを貫かれました。私たちも、自分に都合が良いか悪いかを計算するのではなく、神様が私たちに何を求めておられるかを第一の関心事として、それを実現するために働いてゆくことが大切です。そうすれば、神様は私たちを助け、私たちに必要なものをすべて与えてくださいます。」



狭き門、細き路

2015年12月1日

聖書朗読 マタイ伝7章7～14節

皆様、いかがお過ごしでしょうか。我々は、主の群れとして、互いに助け合い励まし合い、担い合い許し合って、キリストの御国をこの世でも体現する召団でありたいと、切に願います。

お忙しい奥田先生は、集会の準備もままならない生活をされています。しかし、語られることは深く本質的で自由自在だと感じます。それは、福音の基本を徹底して身に付けておられるからだと思います。単に頭理解だけでなく実生活を通して身に付けておられるからだと思います。道の民の日本人は、何事も頭と身体の両方を使って身に付けるのだとすれば、福音も、聞いて理解し、そして実践することで自分の物にしていくことが大事だと思います。

先生は、ご自身を含めた召団に対し、

「本気で祈る集会であって欲しい」

と語られます。人前でこれ見よがしにする祈りではなく、戸を閉じて、隠れておられる天の父に向って祈るような祈りです。静かながらも熱く本気で主に向かって祈れば、主は、主の御心に適う祈りは必ず聞いてくださるはずです。祈りに際し、

「我々に必要なことは、主への信頼と忍耐だけだ」

と言われています。主は我々を、ご自身との交わりの中で豊かに豊かに祝福したいと願っておられます。肝心なことは、我々が自らの意志で、主に心を明け渡せるかどうかです。自らの肉の弱さや至らなさ、限界を知り、自分に希望は見出せないといった苦いどん底を味わった上で、その思いを受け止め、許して励ましてくださる主（の十字架）に、心底から感謝できるかどうかです。人生での行き詰りや苦しみは、むしろ主に立ち帰るチャンスです。主の実力を味わうことができる大チャンスです。自らに死に、主にあつて復活する大チャンスです。

先生は、種まきの譬え話をされました。種がいくら蒔かれても、そこがよく耕された土地ではなく、道端や石地だったり、茨のような土地では、実を結ぶことができません。同じく、福音を聞いても、受け取る側が様々な試練を経て人として練られていなければ、決して永続性は得られないし、豊かに実を結ぶことも不可能です。主は何のために福音という種を我々に向かつて蒔かれるのでしょうか？ 福音の実を豊かに結ぶために違いありません。



我は福音を恥とせず

2015年12月6日

聖書朗読 ローマ書1章1節～17節

本日は「京都キリスト召団新館」での今年最後の集会となり、奥田先生はローマ書1章の御言を味わいながら、一年を振り返り自由に話された。それにしても先生を突き動かすキリストの御力をひしひしと感ずる。

「100歳を突破します」

などと活き活きと話されるばかりか、お仕事で忙しい中、日曜毎に嬉しそうに語る先生の御姿は、人の業を遙かに超えている。そして聴く私たちに、

「皆さん、日々、福音を生きていますか。主から力を頂いていますか。私たちは一

週間の生活の中で、小さくても何らかの感謝、讃美の経験があるはずです。日曜

集会で皆さんからそんな証言が無いはずはありません。」

と話され、私たちの臆する心を励まされる。

今年の京都集会のテーマは「祈り」だったが、私たちがキリストと一つとされるためには、祈りの中で主の御声を聴き、御意を受け取るみこころことが大事だ。先生は、今日の講筵の中で、私たちの生活が祈り無くしてはあり得ないし、何事を為すにも、自分の力に頼らず、主に委ね、主の大きな力に全托することを勧められた。ローマ書1章でパウロが書いているように、私たちはキリストから「恩恵と使徒の職」つとめを受けた者として、「キリスト・イエスの僕」であることを恥とせず、聖霊の力に押し出されて、新年に向けて、「福音の持ち運び役」の自覚を新たにしていきたいと思う。

また今日、先生は、今年一年分の「集会だより」を手になされ、集会だよりの内容は京都キリスト召団の公式メッセージでもあるので、京都集会の一年の祈り、歩みを知る上でも、これを折々読み返すことを勧められた。

集会後、食事も、総会を行い、来年度の主な行事予定を確認した。併せて日頃、証言の機会の少ない方に感話を頂いた。

来る12月20日(日)の降誕節集会では、午後に公開講演会を行い、「キリスト降誕の秘義」と題して奥田先生に語って頂く。講演会チラシを使い友人等にお知らせください。

